

# 君の名はシン・ゴジラ

13I 倉島

\*この文章には『シン・ゴジラ』『君の名は。』『秒速5センチメートル』のネタバレを大きく含んでいます。まだ観賞していない方はいますぐ映画館に行き、作品を見てからこの文章を読みましょう。観賞してなくても読みたい方は読んだあとすぐに映画館に行きましょう。

## 1 2016年夏

アニメやゲームなどのサブカル的に見て2010年代はよくないと思う。なぜなら、後世に語られるような大きなムーブメントがないからだ。例えば、90年代に青春を謳歌した人にはジャンプ黄金期、エヴァやプレステなどがあり、00年代にはエロゲ、深夜アニメの盛り上がり、2chなどのネットの普及などがあつた。要するに、この世代は様々な文化の黎明期を体験してきたのである。黎明期というものはなにが正解か分からないため、クリエイターが試行錯誤して面白いものを生み出していく時期である。しかし、ある程度は面白くて売れるモノを作ることができる方法が発見されると、リスクを冒すような挑戦をしなくなるので緩やかに衰退していく。

以上の理由で10年代では、様々なサブカルがゆるやかに下降線をたどっている。エロゲも一般ゲームもアニメも衰退していると言われているし、後世に影響を与えようと思えるくらい面白いモノはここ5、6年は生まれていない。天才、鬼才と呼ばれるようなクリエイターはどこへ行ってしまったのだろうか。SNSでの小規模な自己表現に満足してしまったり、ソシャゲで貴重な時間を潰してしまっているのだろうか。

しかし、最近ではネットの普及で配信が盛んにおこなわれており、以前より様々なサブカルが気軽に楽しめるようになった。過去のコンテンツで時間を潰す時代、それが10年代だと思っていた。しかし、2016年の夏にそんな思い込みを『シン・ゴジラ』と『君の名は。』がぶち壊してくれた。

## 2 シン・ゴジラ、襲来

『シン・ゴジラ』の監督、庵野監督の第一印象はエヴァの人である。彼自身は相当なアニメ・SFオタクであり、恐らく幅広いジャンルの作品を作れるのだろうがエヴァがヒットしてしまったので、そこに才能と時間を集中させなければならなくなった。実際、エヴァからも幾つかのアニメや実写作品を作っているがどれもぱっとしない。エヴァQと同時公開した特撮作品の『巨神兵東京に現る』はまったく面白くなかった。

だから、最初に『シン・ゴジラ』を作ると聞いたとき、きっと失敗するだろうなと思った。それよりもエヴァを早く完結させてくれと。しかも、日本での特撮自体が風前の灯で、予算的にも物凄いアメリカの『パシフィックリム』『GODZILLA』ほどの作品は作れない

ように思えるし、公開直前のキービジュアルや予告編もあまりぱっとせず、公開日もまったくチェックしてなかった。

しかし、あまりよくなかった前評判からは予想できないほど、公開してから Twitter で絶賛の嵐だった。公開から一週間後についての気持ちで新宿で『シン・ゴジラ』を見ると、予想以上にとんでもない仕上がりになっていた。

### 3 My Favorite Things

あまり詳しい感想は書かないが『シン・ゴジラ』は現代の日本を強く意識した作品になっていた。ここまで、社会的な内容をいれてかつ娯楽性が高い作品は近年なかったのだろうか。特撮的に見ても、あえて会議のシーンを増やし、肝心のゴジラの映像は少なめにする事で、ゴジラの不気味さを際立たせ都心が壊滅するシーンを印象付けるなど、アイデア次第でいい作品を作れることを示した。

社会的な内容と言ったが、ドキュメンタリー的な描き方なので「原子力の是非」や「現代の日本のシステムの欠点」などに対して問題提起しているだけで結論を出していない。あくまで、取り入れたら面白いから使ったのだろう。思想的には中立的な内容だから、見た人によっていろんな解釈ができるようになって感想を言い合いたくなるのだと思う。

様々な意見があるが、この映画で監督が伝えたかったことは「いろんな障害があるけど、できる力があるのだから自分たちがいいと思ったことをやろう。」だと思う。劇中でも、東京に核を落としたい一心で主人公たちはリスクの高い作戦のために奔走するし、「東日本大震災を思わせるような描写を積極的に取り入れる」「従来のイメージとは違いゴジラをエヴァの使徒のようなモンスターに仕上げる」「会議室のシーンを盛りだくさんにする」など庵野監督が好きそうものがふんだんに使われていた。そしてなにより、作中の「私は好きにした。君らも好きにしろ」という言葉は、『シン・ゴジラ』でエゴと趣味まるだしの作品を好きだから作ってしまった自分自身のことと、思うように活躍できない若いクリエイターへの監督なりのエールだったと思う。

このメッセージは、様々なシガラミで面白い作品ができない実写の映画監督にも向けていたのかもしれない。新人俳優や低予算などで挑戦的な作品ができない今の邦画はもったいないと思う。よく話題になったのが、こんな趣味やエゴ丸出しの映画を作れたのは、この作品が製作委員会方式ではなく、東宝が単独出資で庵野監督に任せたため、制作陣が自由に作ることができ、結果的に面白い作品ができたということだった。つまり、いろんな人がそれぞれの立場で口出しする製作委員会方式はよくないということだった。この考えは一か月後に公開された『君の名は。』で覆された。

## 4 星を継ぐもの

アニメ監督、新海誠は00年代のオタクである。まず彼はアニメ会社に入るのではなく一般の会社に勤めながらコツコツと一人でアニメを作り、それが評価されてアニメ監督になった。これができたのはPCなどの技術の発達のおかげで、00年代以前では考えられなかったことだ。彼の作る作品もセカイ系という00年代を代表するジャンルを下敷きにしたものが多い。セカイ系というのはきちんとした定義はないが、世界を救うといった大きなスケールではなく、「キミとボクの関係」を物語の軸にしたものである。このジャンルは主人公とヒロインの関係を中心に据えるストーリーのエロゲに通じるところがある。また、彼の作品は風景が非常に凝っていてただ眺めるだけでも飽きない。

そんな彼が2007年に発表した『秒速5センチメートル』は凄まじい作品であった。この作品は三部構成になっていて、第一部では中学生の頃の思いを寄せ合っていた主人公とヒロインを描き、第二部は、転校などで離れ離れになった二人のうちの主人公の高校時代を別のヒロインの視点から描き、第三部では社会人となった二人のその後が描かれていた。この作品の凄まじいところは、スローテンポかつノスタルジックに第一部と第二部を描くことで、観客に一旦離れ離れになった二人がまた再会する物語だと錯覚させておいて、第三部で山崎まさよしの曲にあわせて結局再会しない二人の社会人としての日々を、圧倒的で冷たい東京の風景と共に早いテンポで、観客に叩きつけることにあった。この作品は鬱アニメとして有名になった。一見すると、ヒロインは他の男の人と結婚してしまうし、主人公は仕事の疲れで退職してしまうバッドエンドになっている。ただこれは新海監督の意図しないところだったらしい。この作品は非常に素晴らしいのだが、新作のたびに比べられるなど彼にとって非常に高い壁となってしまった。

新海誠のウィークポイントは人物描写が下手なことにあると思う。彼の実写よりのアニメだと登場人物の言動や行動が、実写とアニメどちらの描き方をしてもどこか浮いてしまっているのだ。この点では『秒速5センチメートル』ではノスタルジックな第一部と第二部ではアニメよりも違和感がなかったし、現実的な第三部では台詞をあまり入れずPV風に断片的な描写を次々にいれることで違和感がない作品になっていた。『秒速5センチメートル』では監督のウィークポイントを回避することができていたが、その後の作品には同じ手法をいれることができなかつたため『秒速5センチメートル』に及ぶような作品は到底作れないし、またこれからも作れないように思えた。実際、去年までの彼の仕事は圧倒的な風景描写が買われてCMが中心であったし、やや作風を変えた『言の葉の庭』という映画がやや面白いくらいだった。『君の名は。』を見るまでは『秒速5センチメートル』を超えられない監督になってしまうと思えた。

## 5 『君の名は。』

正直に言うと『君の名は。』を見た感想は「これは本当に新海誠が監督をしたのか？他に監督がいるのではないか？」と思うくらいエンターテインメントに振り切った作品になっていた。監督の長所と短所を完璧に理解して、なお一般の人に受けるためにどの俳優を使

うか、どのようにラッドウィンプスを使うかなど計算し尽くされていた。前述した監督のウィークポイントも、キャラクターデザインと作画をアニメ寄りにしたため回避されていた。これらは映画プロデューサーが大きく関わったらしい。監督の力を最大限発揮するために、映画プロデューサーたちが適切に提案したり他のクリエイターを紹介するなど、まさに理想的な製作委員会方式がとられていたのである。

ストーリーも大きく変わっていた。いままでの新海誠作品の登場人物たちは無力でセカイに翻弄されてきた。それが今作では救えないはずの人たちを救ってしまうし、出会えないはずの二人が出会ってしまうのである。これは作品を売るために監督が今までの作風を放棄したように見えるが、ポジティブにいままでとは違った作品を作ったと捉えたい。

ここまでくると新海誠要素がないように思えるが実は『言の葉の庭』での古典の引用、『秒速5センチメートル』の都市と地方の比較などの、過去の作品のオマージュを積極的に入れていて、ある意味では新海誠の総決算的な作品にもなっている。それにあくまで主人公とヒロインの関係を軸に据える「キミとボクの関係」のセカイ系になっている。そもそもセカイ系はオタクものであったが見せ方によってはロマンチックで女子高生をもターゲットにできたのかもしれない。ここまでくると、非の打ちどころのない作品に思えるが「口噛み酒」などのやや一般受けしない監督の趣味（見た男子中高生になにかを感じてほしかったらしい）や、やや登場人物の行動が不自然などの欠点も見える。だが、そのようなところも魅力に感じるのかもしれない。気がすごく早いけれども、総決算かつ新境地の『君の名は。』の次の新海誠作品がとても見てみたい。

## 6 春はあけぼの

2016年の夏に、『シン・ゴジラ』での「日本のクリエイターは好きなものがつくれているのか？」という疑問に、『君の名は。』が鮮やかな回答を見せてくれたことで、今までは不作だと思っていた2010年代はいい時代だと思った。誰も取り入れなかった要素を積極的に使い成功を取めた『シン・ゴジラ』と、作り方によってはいままでアニメに縁がない層も取り込めることを証明した『君の名は。』によって、アニメ映画の新時代が切り開かれたと思う。この他にも『聲の形』もいい作品だったし、クラウドファンディングという新しい製作方式で作られた『この世界の片隅に』も公開を控えている。さらにこれらの作品に触発されて他のクリエイターがさらに面白い作品を作ってくれる確かな希望がある。これは始まりに過ぎなくて、黄金期はこれから迎えるのかもしれない。